

阿岐のまほろば Vol. 24

戦国時代の土木工事

おかじょうあと し わちょうし わ にし
岡城跡（志和町志和西）



し わちょうし わ にし おかじょうあと
志和町志和西に所在する岡城跡で見つかった戦
国時代の堀のようすです。堀は尾根にほぼ直交す
る堀切と郭を囲むように巡るものがあり、江戸時
代の城にみられる堀（濠）と異なり、水を溜めて
いない空堀です。主要な郭である北1郭は平地と
の比高約20m、堀底との比高は約13mで、背後の
堀切や郭のまわりを切り落とした人工の急斜面（切

ぎし
岸）など、大規模に地面を掘り下げて造成されて
います。また、残った土砂は、周囲を埋め立てて
郭を拡張し、盛土によって土塁を造るなど有効に
活用されています。

このように、山城をつくるにあたっては、自然
地形を利用するとともに、人力による大規模な土
木工事が必要とされました。



岡城跡全景・南西から (左：北・西郭、中央：堀群、右：南郭)

城跡は、最大の平坦部(42m×21m)をもつ北1郭とその周りの郭からなる北郭を中心に、西・南の郭群と堀から構成され、平地との比高は約20mです。北郭は、中央を横切る堀切・空堀によって、南郭や背後の尾根から分断されています。また、東郭は堀を埋めた後に平坦面をつくり、郭としています。

城の中心である北郭(北1郭)では、郭の中央で平面規模が2間×2間(6m×4.8m)の建物跡が見つかっています。建物の位置や規模の大きさから城の中心的な建物で、遠くを見渡すことができる「望楼」と考えられます。また、建物跡近くの小穴4基からは、重ねて埋められた土師質土器皿(かわらけ)や古銭が出土し、建物に関わる祭祀(地鎮)遺構の可能性が考えられます。このほか、北郭の南側にあたる堀に面した部分には、石積によって補強された土塁があります。土塁に隣接して2本柱の門跡があり、門の外側は登城路へとつづいています。

西郭については、大部分が調査範囲外のためよくわかりませんが、城の先端にあり、平地からの

比高数mで比較的広い平坦部をもつことから、平時の館や出陣前に軍勢を集結させるための空間があった可能性が考えられます。



石積のある土塁



北1郭の建物跡(「望楼跡」)

志和盆地は、鎌倉時代末期（1300年頃）に伊豆（静岡県）から地頭として入ってきた天野氏が、戦国時代に安芸の有力国人となり、関ヶ原の合戦後の慶長6（1601）年に毛利氏に従って、周防三丘に移るまで本拠としていた地域で、志和堀の財崎城を本拠とする天野氏、志和東の米山城を本拠とする天野氏のほか、志和西にも天野氏の一勢力があったといわれています。16世紀になると、それぞれ財崎城から金明山城へ、米山城から生城山城へと大規模な山城に本拠を移しています。

岡城跡は、生城山・女生城山を頂上とする山塊から北西に延びる尾根先端の丘陵にあり、生城山東麓に勢力をもっていた志和東の天野氏との関係が考えられます。出土した土器・陶磁器の特徴から、城が頻繁に使用された時期は15世紀後半から16世紀前半と推定されます。

16世紀前半には、大永元（1521）年頃、出雲の尼子氏が南下した際に天野氏もその配下となり、

同3（1523）年に、尼子氏は大内氏城番の拠る鏡山城を落城させています。また、同5（1525）年、大内氏が米山城を攻め、天野氏は大内氏と講和しています。その後、天文9（1540）年には、天野氏は毛利氏を応援して吉田に出陣して尼子氏と対峙するなど、諸勢力との緊張状態が続いています。

このような情勢のなか、岡城跡は盆地西側をにらむ城、のちには指呼の距離にある生城山城をとりまく支城のひとつとして機能したと思われます。

その後の岡城跡については、16世紀後半を示す遺物がほとんどなく、城跡は使用されなかったものと思われます。この理由としては、城郭の機能が生城山城に集約された可能性があること、毛利氏を中心に安芸国内が政治的に安定し、岡城跡の戦略的意義が弱まったことなどが考えられます。

参考文献：『広島県史 中世』 広島県 1984年

『志和町史』 志和町 1970年



周辺城郭位置図（5万分の1地形図「可部」・「海田市」）



岡城跡出土の土器・陶磁器
左前列から、中国産青磁、瀬戸美濃焼小杯、
備前焼播鉢、土師質土器皿・鍋



江戸時代の埋甕
原村焼（はんどう）を使用しています。

城跡からは、素焼きの土師質土器（かわらけ）の皿・鍋・火鉢・香炉や備前焼の播鉢、中国産の青磁碗などの陶磁器、鉄製品（鉄鎌・鉄釘）などが出土し、食器や鍋類は、有事に駐屯した軍勢が使用したものだと思われます。

北郭の平坦部からは、江戸時代の遺物も出土しています。遺物は、江戸時代初め頃（17世紀）につくられた唐津焼の灰釉皿や天目碗のミニチュアのような瀬戸・美濃焼の鉄釉小杯、中国産の青花（染付磁器）、中頃（18世紀）につくられた肥前の染付磁器なども出土しています。

また、南郭では江戸時代の建物跡・柵列・埋甕遺構などが見つかり、城としての機能を失った江戸時代には、この丘陵の平坦部が居住空間として利用されていたことがわかりました。



古墳時代の箱式石棺



石棺出土の管玉・小玉

丘陵の先端部分では、弥生時代後期（3世紀頃）の竪穴住居跡のほか、古墳時代後期（6世紀頃）の箱式石棺が見つかりました。石棺は小型の墳丘をもつ古墳の埋葬施設であったと思われます。遺物は石棺内に副葬された管玉・小玉のほか、石棺の付近から須恵器が出土しています。

この墓に葬られた人については、規模や副葬品、弥生時代の墓制であった「箱式石棺」を引き継ぐことなどから、この地域に勢力をもつ在地系有力者層の一員と考えられます。

以上のように、遺跡では中世の城館のほかに弥生・古墳時代や近世の遺構・遺物も見つかり、この地域が生活に適した場所であったことがうかがえます。（出野上）

財東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 24

発行日 2002（平成14）年3月26日

編集・発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター
東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 0824-25-3880 〒739-0033

印刷 株式会社 ニシキプリント

広島市西区商工センター7丁目5-33